

# データ分析を駆使した 英文法・語法問題集『UPGRADE』

PRODIGY 英語研究所 霜 康司

## 1. はじめに

PRODIGY 英語研究所<sup>1</sup>は、高校生用の英文法・語法・単語・熟語の問題集として『UPGRADE 英文法語法問題集』(以下、『UPGRADE』)を開発した。現在、同種の本は数多くあり、たいてい「コンピュータ分析」、「頻度順」、「入試問題を徹底分析」というような宣伝文句が書かれている。私たちの『UPGRADE』にも上のようなコピーをつけることができるが、それでは、同じような本が受験参考書の本棚にまた1冊増えるだけなのだろうか。答えはノーだ。この本は全く違う。なぜなら、私たちは本当にコンピュータ分析を徹底したからだ。別の言い方をしよう。もし他の本が本当にコンピュータ分析をしていたら、私たちはこの本を作成する必要はなかったのだ。

## 2. 脱「受験英語」宣言

日本の学生の英語力が国際的に低水準であることを嘆いて、英語を小学生に教えるかどうかを議論する前に、現在の教科書・参考書・辞書などの内容を真剣に見直してみてもどうだろうか。カリキュラムをどのように変えようと、入試にリスニングを導入しようと、学生の学力を大きく左右するのはテキストの内容である。これまで多くの人が「受験英語」の弊害を指摘してきたが、実は「受験英語」はもはや受験でさえ役に立たないという事実にお気づきだろうか。なぜなら、現実の入試問題は驚くほど実用英語に近づいているからである。奇妙な話だが、「受験英語」を生み出してきたのは「受験」でもないし、大学入試問題でもない。さらに言えば、「受験英語」という怪物を生み出したのは、外国人講師に習いさえすれば使える英語ができるようになるという幻想と同じ思考パターンなのかもしれないのだ。

### 2. 1. 「受験英語」の正体 — be senior to の場合 — おそらく、中学校・高校を通して (be) senior to A

「Aより年上である」という用法を一度も教わらなかった日本人は、ほとんど皆無であろう。例えば次のような用例だ。

He is senior to me by three years.

(彼は私より3歳年上だ。)

実際、たいていの参考書や英和辞典がこの用法に言及し、その多くが太字や赤字で注意を促している。ところが、実際の英語ではこういう用法はほとんど存在せず、日本人が学んだり使ったりする必要は全くない。例えばTIME誌7年分以上の記事に出現した2,000例以上の senior の用例で、(be) senior to A 「Aより年上だ」という用例は、1つも見当たらなかった。また、The Bank of English<sup>2</sup>のような数億語に及ぶ巨大データベースで検索してみても、そのような用例はほんの数例見られるだけだ。

ところが、日本の英語の辞書・参考書は、必ずと言っていいほどこの用例を大切に扱っている。多くの辞書のはしがきには、語義について「配列は原則として使用頻度順とした」と書かれているし、多くの参考書はコンピュータ分析をうたっているのに、どういうわけか2,000例を調べても出てこない「年上の」が1番に挙げられている。

### 2. 2. 「受験英語」が受験に出ない!

— be senior to は入試で出るか? —

「受験英語」の悪しき代表とでも言うべきこの (be) senior to は、実際に大学入試でどれほど出題されているのだろうか。PRODIGY 英語研究所のデータベースにある10年間4,000回の大学入試で、この表現はたった5回しか出題されていない。これは例えば、hit the nail on the head 「正確に要点を言う」と同じ頻度であり、頻度順ならこれより前に数千の項目を覚える必要があるはずだ。そしてもちろん長文の中でも、(be) senior to は一度も出現していない。つまり、こと senior に関する限り、実際の大学入試問題は有名な英和辞典よりはるかにこの単語の実態

を表していると言える。

では、実用英語でも使わないし、大学入試にも出題されない (be) senior to が、堂々と重要表現として掲載されている参考書を毎年何十万人もの学生に覚えさせる状態を放っておいていいのだろうか。

問題は何も seniorに限ったことではない。ベストセラーの参考書や問題集には、次のような表現が堂々と掲載されている。

- ・ directly ㊦「…するとすぐに」
- ・ want + V-ing 「Vされる必要がある」

これらの表現は、確かに英英辞典などにも掲載されてはいる。しかし、実用英語でも、directlyの接続詞用法はイギリス英語にわずかに見られるだけで、アメリカの雑誌 TIME などにはまるで見られないし、want + V-ingは TIME 誌7年分でも1例あったただけだ。大学入試問題においても、directlyの接続詞用法は4,000大学でわずか1例、want + V-ingは3例あるにすぎない。

こんな表現を何十万人もの学生に覚えさせている現状を変えられるのは、もちろん私たち英語教師においてほかにない。

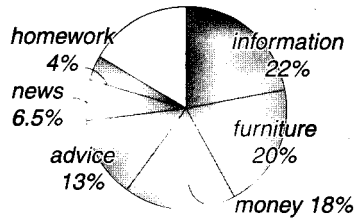
### 3. 『UPGRADE』の特長

#### ①頻度検査を徹底した『UPGRADE』

『UPGRADE』各章の最初にはすべて、Data Researchと題したコラムを設けている。これは、その章で登場する項目について、最近10年間の大学入試問題における出題頻度を徹底的に調査した結果である。例えば、時制の章のData Researchは次のようになっている。

時・条件の副詞節中の時制 (235)
現在完了形 (231)
過去形 (169)
過去完了形 (143)
現在完了進行形 (45)
未来完了形 (45)

これを見れば、「時または条件を表す副詞節中の時制」がいかによく出題されているかが実感できるだろう。もちろん、こういう重要項目であれば、データを取るまでもなく英語の授業で必ず触れるだろう。しかし不可算名詞に関する次のデータはどうか。



これは、過去10年間の不可算名詞に関する問題157問に基づいたデータだ。もちろん、英語において不可算名詞は数限りなく存在するので、あらゆる問題に対応しようと思えば、無限に覚え続けなければならないことになる。しかし、上のグラフを見れば学生も安心するのではないだろうか。なぜなら、不可算名詞の全出題のうち、たった6つの単語に関する出題が83%に及ぶのだから。全部で10個の不可算名詞を覚えていれば、95%をカバーできるのである。もちろん英作文などを考えるとこれだけで安心だとは言えないが、まずはこの6つの単語から覚えるのが効果的だということは否定できない。

このようなデータ調査は、現在の大学入試問題の実態を明らかにしてくれる。次のData Researchをご覧ください。

設問	長文
(62) get along with	(287)
(48) come up with	(223)
(13) keep early hours	(15)
(11) make much of	(6)

これは基本動詞の熟語に関する調査結果で、左側のグラフおよび数字は、大学入試で設問として問われた数を表している。右側のグラフおよび数字は、短文の設問以外の長文中での出現数を表している。これを見れば、get along withやcome up withは設問でよく問われており、長文中でもよく出現しているのがわかる。一方、keep early hoursやmake much ofは、空所補充や書き換え問題で問われている割に長文中ではほとんど出現していないことがわかる。大学入試の長文問題のほとんどが新聞・雑誌・書籍などのいわば「生きた英語」である一方、空所補充や書き換えなど短文の設問は出題者が「作った英語」である場合が多く、そのため「生きた英語」との間に頻度的なずれが生じているのであろう。

『UPGRADE』では、すべての項目についてこのような詳細なデータ分析を行い、入試において本当

に覚えるべき項目だけを提示した。データリサーチのおかげで、本書は類書よりもかなり薄くなった。類書に載っている項目が本書になくても、不安に思われぬようにお願いしたい。10年間に数回しか入試に出ず、生きた英語でも出会わない項目を収録しなかっただけなのだから。

## ②類書にない頻出項目 一多義語など一

これまでの類書では扱われてこなかった頻出項目を、『UPGRADE』ではいくつも取り上げている。例えば、多義語は英文法の頻出項目と比べても見劣りしないほどの出題数があるのに、多義語に関して充実した記述がある参考書はこれまでほとんどなかった。下の Data Research を見ていただきたい。

case	(156)
account	(153)
chance	(121)
term	(94)
charge	(71)

最近10年間で case の問題が156問、account の問題が153問も出題されているが、これを例えばif節つきの仮定法過去形(101問)と比べてみると、caseのほうがよく出題されていることになる。従来の参考書は、500ページ近くあるにもかかわらず、これだけ頻出の多義語を載せてこなかった。例えば、account for Aを類書で調べてほしい。もし「Aを説明する」としか書いていないとしたら、決してお勧めできる本ではない。なぜなら、それと同じくらい重要な用法で「(割合など)を占める」という意味がセンター試験の設問にさえ出ているからだ。もちろん本書では、すべての表現・単語について意味の頻度までチェックし、覚えるべきものはしっかりと網羅している。

また『UPGRADE』では、however, for example などの文と文をつなぐ語句のために1章を割いた。これはセンター試験で出題されているばかりか、長文読解のポイントにもなるのに、やはりほとんどの類書で見過ごされてきた項目である。

## ③受験英語と実用英語の橋渡し

『UPGRADE』は入試問題を徹底分析するだけでなく、実際の生きた英語の用法にも十分配慮している。例えば、関係代名詞の but は現代英語ではめったに使われず、実用英語という観点からは学生に教える必要はほとんどないが、There is no rule

but has some exceptions. のような表現があいかわらず入試には登場している。そこで本書では、「現代英語では使われない」と明記したうえで収録している。

また、the better of the two と the best of the two をインターネットで検索してみた。すると the better of the two がおよそ94,000件、the best of the two がおよそ26,000件あった。この数字を見れば、どちらの表現も立派な英語なのだが、受験英語では必ずしもそうではない。例えば次の入試問題を見てもらいたい。

Of the two girls Meg is ( ). [同志社大]

- a) more brighter    b) the brightest  
c) the brighter    d) the most bright

出題者はどれを正解としたのだろうか。上の数字を見ればb), c)ともに正解とすべきところだが、正解が2つあるというのは misleading であるし、もしc)のみを正解としているのなら大問題である。このように、受験英語の中にはまだまだ実用英語と異なる点がある。そこで本書では、できるだけ積極的にこのような問題をQ & Aなどで取り上げ、読者に本当に使える英語をマスターしてもらえるように配慮した。

**Q & A** the + 最上級 + of the two は誤りなの？  
入試では「2つの中で一番」という意味を表すために、the + 比較級 + of the two を選ばせ、the + 最上級 + of the two を誤りとする問題が多い。しかし実際には the + 最上級 + of the two という形も使われる(頻度は比較級の10分の1弱)。

本書で学んでくれれば、「受験英語も実用英語として役に立つ！」と胸を張ってもらえると思う。

## ④頭スッキリ！覚えるための整理本

どれほどデータを分析し、正しい英語を収録していたとしても、使っている学生の頭に何も残らなければ意味がない。そこで、『UPGRADE』には覚えるためのノウハウを随所にちりばめた。

例えば英熟語の章を見ていただければ、ひと目で類書との違いに気づいていただけるだろう。

**UPGRADE 200** come と bring は自動詞と他動詞のペア

自動詞 come に対応する他動詞が bring だ。熟語でもこの関係は成り立つ。

A come to an end 「Aが終わりになる」

bring A to an end 「Aを終わりにする」

上のように come の主語 A が bring の目的語になっているペアの熟語がたくさんある。(訳語の「が…なる」→「を…する」にも注意。)

このように提示しておけば、1つ1つの熟語をバラバラに覚える必要はなくなる。A come about 「Aが起こる」と bring A about 「Aを引き起こす」も、A come out 「Aが出版される」と bring A out 「Aを出版する」も同じような関係で整理できるから、効率よく頭に収まるはずだ。もう1つ例を挙げよう。

**UPGRADE 267** 「わかる」の out

「隠されていたことが外に出る」= 「わかる」という意味。

こうしておけば、make A out, figure A out, turn out, work A out, find A out など、多くの熟語を一気に覚えることもできるのだ。本書の設問の配列はこのようなまとまりが自然と覚えられるように構成されているから、頭に残る整理本として十分活用できるだろう。


**⑤ 「問われ方」もそっくりの中!**

入試問題では特定の事項がいつも同じ問われ方をする。例えば次のグラフを見てほしい。

come up with A	(48)
× become to V	(31)
× get married with	(22)

come up with A は入試で頻出の熟語の1つだが、× become to V や × get married with A という誤った形も頻出と言えるだろう。もちろんどちらも誤りの選択肢としてだが、このように入試問題における問われ方には特徴がある。例えば stand by A は「Aを支持する」という意味を覚えているだけでは入試で得点できない。なぜなら、stand by A の設問の20問中17問(85%)までが support A との言い換えで出題されているからだ。『UPGRADE』はこのような設問のパターンも分析したうえで設問を選定しているから、本書で出会う形=本番で出会う形となるはずだ。

**⑥ センター試験から発展問題へレベル分け**

『UPGRADE』はセンター試験の過去問をすべてチェックし、センターに既出の事項には  のマークをつけた。これを見れば、センター試験が決して英語全体の中からもまんべんなく出題しているのではなく、特定の項目を何度もねらっていることがわかるはずだ。

不定詞 (43)

接続詞 (33)

関係詞 (32)

上の3つの項目はセンター試験の第2問622問中で最頻出の項目だ。さらに、単語別に見ると what 関連は14問で2番目に多い出題(1位は have : 16題)だが、これは『UPGRADE』の関係詞の分析とぴったりに一致している。


関係代名詞の what (215)

前置詞+関係代名詞 (170)

関係代名詞の which (114)

関係代名詞目的格の省略 (110)

関係副詞 where (97)

センターだけではなく過去10年間の入試問題でも、what は関係詞の最頻出事項であった。さらに『UPGRADE』の分析はセンターにとどまらない。早慶上智など最難関大学の入試で特に重要な設問は、 **発展** マークをつけて収録している。レベルに合わせて必要な問題から学習でき、いつ始めても使いやすいように配慮した。

**4. おわりに**

このように、私たちは『UPGRADE』に持てる力をすべて注ぎ込んだ。どうか私たちの苦労を重ねたデータ分析を見ていただきたい。そして、本書をさらに upgrade するご提案をお待ちしたい。

**注**

<sup>1</sup> 英語の研究者同士が様々な情報交換を自由に行い、日本の英語教育の発展に寄与するために設立された非営利団体。http://www.stagedirect.jp/~fi/

<sup>2</sup> COLLINS / COBUILD の元資料である数億語のデータベース。